

南昌大学医学部と附属病院の訪問記

2015年6月22日 佐賀大学

生体構造機能学講座(神経生理学分野) 熊本栄一

看護学修士課程(国際保健看護学分野) 田中沙恵

(1)はじめに

今年の3月30、31日の2日間、中国江西省の省都南昌市にある南昌大学医学部と附属病院を訪問した。1993年、佐賀大学医学部(佐賀医科大学)は南昌大学医学部(江西医学院)と学术交流協定を結んでおり、20年以上交流が続いている。今回の訪問は、熊本は4回目、田中ははじめてであった。南昌大学医学部出身であり佐賀大学医学部で下垂体後葉ホルモン(オキシトシン)作用の研究により博士の学位を取得し、現在、神経生理学研究室の助教である蔣昌宇君、特別研究学生の朱蘭さん(4月終わりに帰国)および研究生の王翀さん(4月に医学系研究科博士課程に入学)が我々の訪問に同行した。3月29日の夕方に上海経由で南昌市の空港に到着すると、前回の訪問の時と同様、以前神経生理学研究室に1年間留学していた楊柳医師(後述)と、同研究室においてハチ毒由来のペプチド(メリチン)作用の研究で博士の学位を取得した柳涛講師(後述)に出迎えて頂いた。当日の夜は滞在中の宿泊施設である七星ホテルのレストランで夕食を共にして再会を祝した。

今回の訪問の目的は、両学部間の交流を深めると共に、今まで神経生理学研究室に留学したことのある4名(楊柳、康欽、徐志昊、朱蘭)が所属していた神経内科、また、王さんが所属していた消化器内科の研究室と交流を持つことであった。田中は王さんの日本での生活を手助けするためのチューターを務めており、同大学の看護学科と附属病院の看護部を見学することを目的としていた。今回、熊本が学部間交流と研究室訪問(2)を、田中が同大学の看護学科と附属病院の看護部(3)を紹介したい。

(2)学部間交流と研究室訪問

3月30日の午前中、New Campusと看護学科を見学した後((3)-1を参照)、医学部長の李葆明(Baoming Li)教授、副医学部長の羅時文(Shiwen Luo)教授、梁(Shangdong Liang)教授、蔣(Liping Jiang)教授と面談した。佐賀大学の藤本一眞医学部長からの親書を李医学部長に手渡し、今後も両学部間で学术交流を続けることを確認した。南昌大学医学部から佐賀大学医学部へ留学する学生さんは多い一方、佐賀大学医学部から南昌大学医学部へ留学する学生さんはいないので、佐賀大学医学部の学生さんに南昌大学医学部や附属病院への見学を勧めて下さいとのことであった(写真1)。会談後、昼食を共にし、交流を深めた。

李学部長は、京都大学の霊長類研究所や東北大学医学部に留学していたそうで、脳生理学者として著明な久保田競先生や丹治順先生のもとで学んだとのことである。日本語を多少ご存じであり、「大家さん」という言葉が何度も出てきたので、留学中に下宿の大家さんに大変お世話になったことが推察された。



写真1 左から順に、羅、李教授、田中、熊本、蔣、梁教授。

羅副医学部長は佐賀医科大学大学院医学系研究科博士課程(指導教員は旧薬理学教室の麻川武雄名誉教授)を終了し、香港大学や米国アトランタの大学での留学を経て、現在の職を得られている。私は、羅教授が佐賀医科大学留学中から存じており、米国に留学されている時には、私が北米神経科学会に出席した時によくお会いすることがあり、一緒に食事をした。今回の訪問に際して羅教授に大変お世話になった。なお、羅教授の奥方は佐賀大学工学部で博士の学位を取得されている。

梁教授のご専門は神経生理学であり、末梢神経レベルでの痛みの研究をされている。そのため、2007年、私が「Cellular and Molecular Mechanisms for the Modulation of Nociceptive Transmission in the Peripheral and Central Nervous Systems」という題目の本を編集する機会があった時、梁教授に1章を執筆して頂いた。梁教授の研究室出身の岳海源君が神経生理学研究室で神経ペプチドであるガラニンの作用の研究により博士の学位を取得している。現在、岳君は米国のジョージア州オーガスタにあるジョージア・リージェンツ大学でポスドクをしている。

蔣教授は薬理学を専門とされているそうであるが、講義があるために一緒に昼食をとることが出来ず、お話をする時間はあまり持てなかった。

昼食後、私は「Activation by plant-derived chemicals of transient receptor potential channels involved in spontaneous L-glutamate release enhancement in adult rat superficial dorsal horn neurons」というタイトルで講演する機会を与えて頂いた(写真2)。今まで、南昌大学医学部からの留学生が得た実験結果を紹介した。講演終了後、胡春松医師から御自身が執筆された「青春詩語」という本を頂いた。



写真2 講演の様子。羅教授に司会をして頂いた。

その後、羅教授と柳さんの研究室、さらに、梁教授の研究室を見学させて頂いた。羅教授の研究室では、前回の 2011 年暮れに訪問した時と比べ、より一層実験機器が整備され研究が活発に行われている印象を持った。中国経済の発展に伴って研究費の配分が増えていることが推察された。米国式の研究室を目指されているようであった(写真3)。



写真3 羅教授の研究室の様子。羅教授(手前)に案内して頂いた。

私の研究室では学位取得者に盾を贈ることにしているが、柳さんがこの盾を机の

上に飾っていることが嬉しかった。羅教授の研究室に、山梨大学分子病理学の範江林教授の研究室でポスドクをしていたという女性がおられたが、その範教授は渡辺照男先生が佐賀医科大学病理学教室で教授をされていた時に学位を取られた方である。

当日の夜、我々は、羅教授を始めとする佐賀大学医学部へ留学したことのある柳濤さんや楊柳さんや康欽さん(上述)、姚さん(Can Yao)や黄さん(Yuan Huang;佐賀医科大学教養部生物学教室で研究)、段平国さん(組織・神経解剖学教室で増子貞彦先生や河野史先生と研究)、そして、昨年、整形外科教室に1年間留学していた Kou Sun さんと一緒に夕食をとった(写真4)。

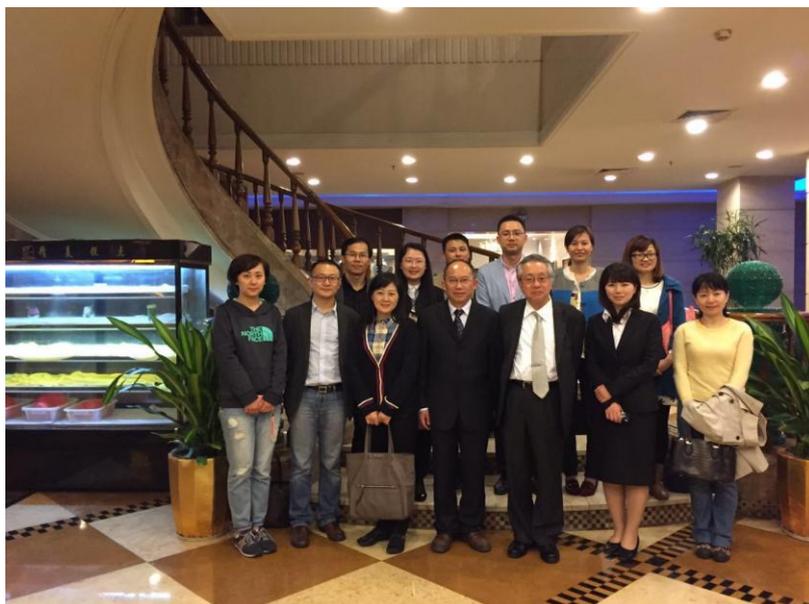


写真4 前列左から、康、蔣、柳さん、羅教授、私、田中、黄さん。
後列左から、段、王、姚、Sun、朱、余さん。

翌日の3月31日は早朝から病院見学を行った((3)-2を参照)。最初は、消化器内科、次に、神経内科、そして、リハビリテーション科を見て回った。日本同様、医師や看護師は多忙のようであった。duty room と呼ばれる部屋があり、毎日、泊まり込んで仕事をすることであった。病院職員が昼食を取るための時間が少ないためであろうか、弁当業者の用意した弁当を見かけた。楊柳さんは神経内科からリハビリテーション科に移ったのであるが、診察を受けた患者さんから感謝されて、彼女の名前を記した記念の壁掛けをもらったそうであり、それを興味深く拝見させて頂いた。病院見学の途中に佐賀大学附属病院小児科で1ヶ月間研修を行ったことのある陳教授に偶然お会いした。その日の昼、王さんの先生である消化器内科の李(Guo Hua Li)教授と一緒に昼食をとりながら歓談した。病院見学の合間に、楊柳さんの旦那さんの車で南昌市の歴史的名所である滕王閣(とうおうかく)を案内して頂いた。これは長江右岸の支流であるカン江の側にあり、7世紀の半ば(唐代)に建てられたもの

で、江南の三大名楼の一つだそうである。ここから南昌市を一望することが出来た(下の写真5を参照)。



その日の夕食は、Deng Li Ying 教授ら神経内科の人たちと、この研究室出身の楊柳、康欽、朱蘭さん、そして余婷さん(4 月末に特別研究学生として来日)とともに歓談しながら夕食をとり交流を深めた。

(3) 看護学科と附属病院の看護部

3月30日の午前中に同大学看護学科、3月31日の午後に附属病院看護部を案内して頂いた。今回、非常にタイトなスケジュールであったにも関わらず、熊本先生、また南昌大学の諸先生方からのご厚意により、これらを訪問することができた。南昌大学の看護学生・看護教員・病棟看護師との交流は、非常に有意義なものであった。以下、(3)-1と(3)-2のそれぞれで、看護学科と看護部をご紹介したい。

(3)-1. 南昌大学 看護学科

南昌大学は南昌市中心部に位置する Old Campus と、そこから車で30分ほどの距離にある New Campus の2つのキャンパスから構成されている。看護学科のある New Campus は、我々の鍋島キャンパスのような雰囲気であり、都市部の喧騒から離れた緑の多い地域であった(写真 6)。ここでは、看護学科の教員・学生に、講義室(写真

7)や演習室(写真 8)等を案内して頂いた。

先生方の話によると、日本同様、中国にもいくつかの看護師免許取得ルートがあるそうだ。①中学卒業+3年間、②高校卒業+3年間、③高校卒業+4年間…等があり、南昌大学は、③の学部教育課程を有している。②となるか、③となるかは、高校の成績によって振り分けがなされるそうだ。学部卒業後は、日本と同様、看護師として就職するが、南昌大学の場合、学部卒業生の大体 10-20%が修士課程に進学し、修士号を取得するという。修士号取得者は、教職に就くと話されていた。博士課程については、他大学で設けている所もあるが、まだ一般的ではなく、南昌大学でも設置していないとのことであった(帰国後に調べた所、中国では修士課程が 1992 年、博士課程が 2004 年から開始となっているようだ)。中国においても、看護の教育・制度は議論と変遷を繰り返しており、日本同様、過渡期である印象を受けた。

後半は看護学科長の計らいで、看護学科 2 年生の授業へ招待して頂いた(写真 9)。自己紹介の後、15 分程の質疑応答を行った。「日本の看護師は、1 人で何名の患者を看護するのか」「医師は何名の患者を診るのか」「男性看護師はどのくらいいるのか」「日本と中国における看護の違いは何か」といった質問が次々となされ、学生との対話を行った。彼らのキラキラとした目や、積極的な態度がとても印象に残り、私自身とても刺激を受けるご招待であった。



写真 6-1▲南昌大学 New Campus
医学部は、看護学科を含め、11 学科を有している。

看護学科学生数:623 名

学部生:464 名

(看護学科 1 学年:116 名)

修士学生:49 名

その他:科目履修生等



写真 6-2▲ここから先が看護学科
看護学生 2 名と教員 1 名が、看護学科内を案内してくれた。

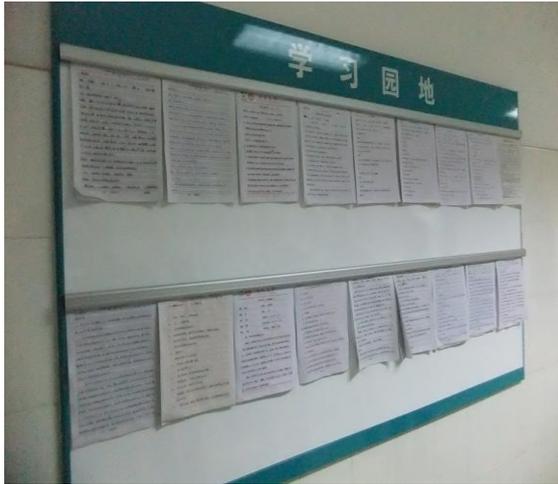


写真 6-3▲廊下の掲示
病院実習における優秀者の看護記録が掲示されていた。日本では、あまり見かけない光景である。



写真 7▲講義室
後ろには、ナイチンゲールの肖像画が掲げられていた。



写真 8▲演習室
学生が 24 時間使用可能。
技術練習に通うことができる。
4 人で 1 つのベッドを使用。



写真 9▲看護学科 2 年生授業訪問。
温かな拍手と笑顔で歓迎された。

(3)-2. 南昌大学附属病院 看護部

南昌大学附属病院は、南昌市中心部に位置しており、第 1 附属病院、第 2 附属病院、第 3 附属病院、第 4 附属病院、歯科専門病院、眼科専門病院(歯科医・眼科医はそれぞれ別の医師免許が必要)という合計 6 つの巨大病院から構成されている。私がチューターをしている博士課程の王さんは、南昌大学第 1 附属病院に勤務していた。この第 1 附属病院は、病床数 3200 床、看護職員数約 1000 名、患者の平均在院日数は 9.6 日という、とても多忙な病院である。更に彼女が勤務してい

た消化器内科病棟(140床)においては、患者の平均在院日数は7日、入院は常に3週間待ち、連日少なくとも20名が退院し、20名が新たに入院するという驚異の回転率を誇る。実際に、この消化器内科病棟を見学したが、祝日の渋谷スクランブル交差点に立っているかのような感覚であった(写真10)。当然、看護師も激務である。私が話をした夜勤看護師は、「私1人で80人を看ないといけない」と、笑顔で話してくれた(写真11)。日本の看護制度とは異なり、患者の身の回りの世話は付き添い家族が行うといった違いはあるものの、準備室にずらりと並べられた点滴(写真12)や、忙しそうに走り回る看護師ら(写真13,14)を見ていると、私自身が病棟勤務の際に常々、忙しい! と思っていたことが、非常にちっぽけに感じられた。彼女らの積極果敢な働き方に圧倒され、「尊敬」の一言であった。

ところで、日本の医療現場では数年前より、二国間経済連携協定に基づく外国人看護師の受け入れが始まっている。近年、この協定国以外でも、厚労省が示す一定条件を満たした外国人看護師が、日本の看護師国家試験を受験するケースが増加している。特にその中でも、中国人看護師が占める割合、合格率は、擡んでている。更に、メディカルツーリズム、東京オリンピックの開催と、今後より一層の外国人(特に中国人)観光客増加が見込まれている。政策に関しては賛否両論があるものの、今後は地方で働く日本人看護師も、国際感覚を養い、世界を捉え、また協働していくことが求められている現状にあると思う。特に、隣国である中国は、日本において昔も今も、そして今後も、より重要なパートナー国である。

先代の諸先生方のご尽力により、このように南昌大学との交流が脈々と受け継がれ、今回ご訪問させて頂く機会を得られたこと、また王さんのチューターという役割を通して、中国人留学生の皆様と、日頃から仲良くさせて頂けていることを、非常に有難く思っている。

多忙を極める現場であるにも関わらず、今回我々のために、このように貴重な時間を割いて下さった南昌大学の関係者の皆様に、心から、深謝致します。



写真10▲消化器内科病棟(王さんの勤務先)

常に患者で溢れかえっている。内視鏡の予約は常に1か月待ち。



写真 11▲リハビリ病棟のナースステーション
この採血管を翌朝 1-2 人で採るそう。



写真 12▲ずらりと並んだ点滴



写真 13▲ER のナースステーション
白:一般の看護師
緑:ER 専門の看護師



写真 14▲小児輸液室
小児の頭部に看護師がルートを取る。

(4) 終わりに

今回の訪問にあたり、始終同行して頂いた柳さんに、また、今回の訪問に際して旅費と宿泊費を負担して頂いた南昌大学医学部にお礼を申し上げたい。これから益々、佐賀大学医学部と南昌大学医学部との間の学術交流が盛んになることを期待するものである。